

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00046

研究課題名（和文）褻（ケ）としての生命倫理の基礎構築

研究課題名（英文）Constructing the foundation of bioethics from the perspective of "everyday = ordinary"

研究代表者

山本 史華（YAMAMOTO, Fumika）

東京都市大学・共通教育部・教授

研究者番号：20396451

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は、「日常=褻」の観点から生命倫理学の諸課題を問い直すことを目的としている。生命倫理学は、その黎明期には医学・医療を我々の日常生活へと広く開いていく方向性を有していたが、その方向性は次第に失われ、現在は最先端の医療現場や医療政策に呼応する倫理の研究が主になってしまっている。しかし、例えば生命倫理学で頻繁に取り上げられる死の問題一つとっても理解されるが、死は医療だけの問題ではない。それは、日常生活を生きる人間の問題であり、日常の中で再検討されるべき課題である。以上の観点に立つことで、本課題は特に脳死と安楽死を日本人の日常の中に位置づけなおし、両者を下支えするエートスの解明を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1997年の臓器移植法制定から四半世紀が経つが、日本では脳死下ドナー数が伸び悩んでいる。この理由は医療制度の問題として論じられがちだが、実はその背後には臓器へのアニミズム的感覚や意識の有無だけで生死を区別しない死生観があることを主張した点が本課題の学術的意義である。また積極的安楽死に賛成は七割を超えるという調査結果(2015)があり法制化の動きもあるが、日本人の安楽死容認の理由として頻繁に挙げられる「他人に迷惑がかかるから」は、自己決定では片付けられず、他者への関係性が入り込んでいるため、自己決定の理由としては十分ではない。ゆえに法制化には慎重であるべきだと唱えた点が社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to reexamine various issues in bioethics from the perspective of "everyday = ordinary". This is because, in the early days of bioethics, there was a direction to widely open medicine and medical care to our daily lives, but that direction has gradually been lost, and now it is mainly concerned with the study of ethics in response to cutting-edge medical practice and medical policy. However, death is not only a medical problem, as one can understand, for example, the issue of death, which is often taken up in bioethics. It is a problem of human beings who live their daily lives, and it is a subject that should be reexamined in daily life.

Based on the above perspectives, this project repositioned brain death and euthanasia in the daily lives of Japanese people, and attempted to elucidate the ethos that underpins both.

研究分野：倫理学一般 応用倫理学

キーワード：生命倫理 褻 日常 脳死 臓器移植 安楽死 尊厳死 民俗

1. 研究開始当初の背景

「生命倫理学(bioethics)」という語は、1970年にポッターが「生命医学倫理(biomedical ethics)」に対置する形で造ったと言われている。ポッターは、医療関係者向けの生命医学倫理学とは距離を置きながら、生物学、生態学、医学などの領域を統合する目的で「生命倫理学」という学問領域を創ろうとした。以後、生命倫理学は、消費者運動や患者の権利獲得運動といった社会運動とも連動しながら、学際的な学問・活動として発展してきた。

ところが、近年の生命倫理学の動向を概観すると、黎明期にもっていた医学・医療を開いていく方向性はほとんど失われ、医療関係者の専門職倫理へと舞い戻ってしまっている。現在、生命倫理学で扱われるトピックスをまとめると、【図表1】の通りであり、医療現場(病院内)での課題が大半を占めている。もちろん、目まぐるしいほどのスピードで進んでいく医学研究に絶えず応答し、利害を調整しながら、医療政策へ物申す生命倫理は必要である。

生命の問題、すなわち生死の問題は、しかし、医療関係者の特権事項ではなく、生きるすべての人にとっての課題であるのだから、同時に、【図表1】の右側の生命倫理も探究されなければならない。

本研究は「日常=褻(ケ)」という観点から生命倫理の課題を見直すことで、生命倫理学を非医療関係者や病院外へと広く開いていくことを目指す。これは、ポッターが抱いていた生命倫理を医学・医療界だけの問題にしないという構想にも合致し、生命倫理学を本来のあるべき姿に戻す試みだとも言えるだろう。

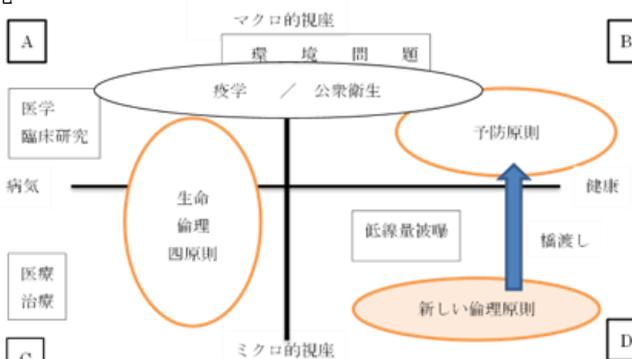
現在、生命倫理学のトピックスになっているもの	現在、生命倫理学のトピックスにはほとんどなっていないもの
病氣・障がいを負う生 (臨床倫理、ケアの倫理、看護、遺伝子診断・治療など)	健康・健全な生
最先端医学・医療 (再生医療:ES細胞・iPS細胞、クローニング、エンハンスメント、ヘルシンキ宣言、倫理四原則など)	通常の日常診療 障がい者や高齢者の日常的な介護
生の始まり (出生前診断、人工妊娠中絶、代理出産など)	「生の始まり」以後の生
生の終わり (脳死臓器移植、安楽死・尊厳死、終末期医療、セーターションなど)	「生の終わり」以前の生
医学部・薬学部・看護学部での教育 (専門職倫理、インフォームド・コンセント、守秘義務、医療コミュニケーションなど)	医療系以外の学部での生命の倫理に関する教育

【図表1】

2. 研究の目的

現在、生命倫理学の主たる探究は、最先端の医学・医療の動向を追いながら、医療政策・ガイドラインの作成などへ提言することであるが、そのような「ハレ」の生命倫理とは距離をとりながら、「日常=褻」に根差した生命倫理を探究するのが本研究の目的である。

右の四分分割表(【図表2】)は、横軸に健康と病気をとり、縦軸に視座の大きさをとった図である。マクロの視座に立って病気の解明をするのが医学(Aの領域)であり、ミクロな視座で個々の患者の病気を治療するのが医療(Cの領域)である。また、マクロな視座で病氣と健康の相関性を考察するのが疫学・公衆衛生(AとBの領域)である。このように整理すると、ミクロな視座に立ちながら健康な生を扱うDの領域が見落とされていることがわかるが、低線量被曝はまさにその領域で徐々に進行している問題である。よって、Dの領域での視座に立った倫理原則やDの領域を生きる常民の生命観・死生観の考察が本研究の目的となる。



【図表2】

3. 研究の方法

生命倫理学が黎明期にもっていた、医学・医療を一般社会へと広く開いていく方向性を取り戻すために、生命倫理学で現在主流となっている、最先端の医療や医療政策に呼応する研究とは距離をとりながら、「日常=褻(ケ)」の観点から生命を問い直していく。

本研究は、(1)国際的なベクトルと(2)文化固有のベクトルの二つのベクトルをもって進める。(1)に関しては、生命倫理学ではほとんど扱われていない低線量被曝の問題を取り上げ、その倫理が「日常=褻」の観点なくしては理解できないことを日本から世界に向けて発信していき、新

たな生命倫理原則の提示を試みる。(2)では、日本人ならではの生命観や死についての考え方・エートスがあるとすれば、それがどのようなものなのかを、日本人の民間信仰や慣習、風俗などを記述した民俗学の文献を分析することで解き明かしていき、来るべき臓器移植法の再改正や安楽死法案に対して適切な提言ができるように備える。

(1)の低線量被曝については、アメリカ型の生命倫理四原則や予防原則との関係性についてはすでに論文発表済みなので、本研究期間中には欧州型の生命倫理四原則(自律、尊厳、不可侵性、弱さ)に対してはどのような提案ができるのかを考察する。併せて【図表2】で示されている「新しい倫理原則」も具体的に示す。また、低線量被曝は、希釈された危険性にどのように向き合うべきかといった問題でもあり、類似の特性を帯びる、電磁波や遺伝子組み換え食品のガイドラインとの比較検討も行う。

(2)の民俗学に関するメタ分析では、日本人の死に関するエートスの解明として、具体的には以下の二点の探究を試みる。

(2)ーA:日本人ドナーが抱く、臓器へのアニミズム的感覚がどこから来るのか

脳死下での臓器移植をしたドナーの家族が「提供した臓器がどこかで生きていてほしい」という感想を述べることもある。なぜ眼前の脳死者が生きていると考えることよりも、臓器を生きていると考えることが優先されるのか。その根拠・理由を探る。キリスト教文化圏では、命は神の所有物であり、人間は命の管理者に過ぎないと考えるため、脳死になった場合、その命を一度神のもとに戻し、神のもとで臓器配分を行うという考え方が強い。それとは別のアニミズム的感覚が日本人には色濃くあるが、それは何に由来するのかを突きとめる。

(2)ーB:日本人は、デカルトやロックのような意識中心の生に対してなぜ違和感を抱くのか

欧米人は日本人と比較すると自己を意識的な存在と捉える傾向が強い。デカルトのコギト、あるいは、ロックが自我同一性の根拠を意識(記憶)に求めたことなどがその適例である。そのためか、「意識がなければ死(脳死)」「自己意識がなくなる前に死にたい(安楽死)」という形で脳死や安楽死が正当化されていることは否めない。対して、日本人は欧米人と比べて、終末期のケアや介護への執着が強い。おそらくそのこととも関係するだろうが、脳死下での臓器提供者数は、臓器移植法改正直後は増えたものの、現在は頭打ちになりほとんど増えていない。ではなぜ意識・自己意識の有無で生死を区切ることに日本人は抵抗感があるのだろうか。それを日本人の民間信仰や慣習、風俗などから解き明かす。

#### 4. 研究成果

本研究の研究期間中に新型コロナウイルス(COVID-19)が猖獗をきわめ、その影響をまともに受けてしまった結果、なかなか思うように研究時間が取れず、研究はあまり捗らなかった。特に上記(1)に記した低線量被曝に関しては、ほとんど結果を出せておらず、研究成果は(2)の日本人の死に関するエートス解明に限られている。

主な研究結果は下記の通りである。

(1)シンポジウム「生命倫理の背後にある生・死・死後の観念」東北哲学会第69回大会(東北大学)、2019年、企画、司会、発表

日本人の死生観と生命倫理学の死の論議をつなげることを目的として、「死の前倒しに先立って考察すべきこと」と題した発表を行った。他に、提題者として、日本思想の研究者である出岡宏(専修大学)と古代ギリシア医学思想の研究者である木原志乃(國學院大学)にも登壇していただき、日本人の死生観と古代ギリシアの死生観との比較検討をした。

(2)山本史華「死の前倒しに先立って考察すべきこと 脳死と安楽死に関わる日本のエートスをめぐって」『MORALIA』第27号、2020年、東北大学倫理学研究会

(1)のシンポジウムでの発表をもとにした論文である。

脳死と安楽死は、いずれも、従来の自然死(三徴候死、心臓死)よりも早い段階での死を容認するが、それは日本のエートスに果たして馴染むのだろうか。というのは、日本ではすでに他の脳死臓器移植容認国と同等の制度が整っているにもかかわらず、臓器提供者数は頭打ちであり増加の傾向を見せないからである。そのような状況下で将来的に積極的安楽死が導入されるとしたら、どのような事態が予想されるのか。以上をテーマとして扱った。

(3)医哲カフェ「コロナ禍のACP」日本医学哲学・倫理学会第40回大会、2021年、発表

コロナ禍における終末期医療における意思表示の問題、特にACP(Advance Care Planning)のあり方の研究を行った。ACPは患者本人の意思だけではなく、患者、家族、医療関係者の対話の中での意思決定、つまり共同意思決定から生まれた考え方であり、そのこと自体は否定されるべきものではない。しかし、ACPの遂行にあたっては、ACPでは決められないこともあるということ意識する必要がある。例えば日本医師会がACP普及のために発表しているリーフレットによれば「患者さんが大切にしたいこと(人生観や価値観、希望など)」を話し合うことが大切だ

と説かれているが、人生観を改めて問われて即答できる患者は多くはないだろう。というのは、人生観や価値観というものは単に個人が形成するものではなく、患者が生きている時代や地域、あるいは患者が信仰する宗教、つまり、一言で言えばエートスとの相関において形成されるものだからだ。現代は特に、その背景となるエートスが多様化し、同時に捉えにくい時代であり、そのような時代に個人の人生観ばかりを問い詰めるのは無いものねだりではないか。要するに、ACP では決められないケースも多々あるということである。以上の問題点の指摘を、学会の年度大会における企画、医哲カフェ「コロナ禍の ACP」で発表をした。

(4) 松島哲久、宮島光志編『新版 薬学生のための医療倫理』丸善出版社、2021 年

死の定義や脳死臓器移植がなぜ問題となるのかを、薬学の学生向けにわかりやすく解説する機会を得たため、本研究のこれまでの成果を反映させながら、上記共著本のなかの「死の定義」「脳死と現代医療における死の意味」「臓器移植は許されるのか」の節を分担執筆した。

(5) The New York Times からの取材、2023 年 2 月 13 日付本紙に記事掲載

「A Yale Professor Suggested Mass Suicide for Old People in Japan. What Did He Mean?」と題した記事のなかで、積極的安楽死の世界的状況とその在り方について専門家の観点からコメントをした。

(6) ロシアのテレビ局 NTV のニュース番組「セントラルテレビジョン」からの取材、テレビ録画動画で出演 (2023 年 2 月 18 日放映)

(5) の記事を受けてロシアのテレビ局から、日本の高齢化社会と安楽死について取材依頼が入り、文書で質問に返答するとともに、録画動画で出演を果たした。

(5) と (6) では、ともに本研究での研究内容が反映されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山本史華	4. 巻 27
2. 論文標題 死の前倒しに先立って考察すべきこと 脳死と安楽死に関わる日本のエートスをめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MORALIA	6. 最初と最後の頁 21-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本史華
2. 発表標題 コロナ禍のACP
3. 学会等名 日本医学哲学・倫理学会第40回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本史華
2. 発表標題 死の前倒しに先立って考察すべきこと
3. 学会等名 東北哲学会 第69回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山本史華	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 178
3. 書名 新版 薬学生のための医療倫理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

(1) The New York Timesからの取材、2023年2月13日付本紙に記事掲載 生命倫理学の専門家として、安楽の死世界的状況についてコメント
(2) ロシアのテレビ局NTVのニュース番組「セントラルテレビジョン」からの取材、テレビ録画動画で出演(2023年2月18日放映) 生命倫理学の専門家として、日本の高齢化社会と安楽死についてコメント

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------